

社会的文化的視点から捉える日本語学習方略に関する研究

東北大学大学院教育情報学教育部

尹 得霞

学位授与年月日：平成26年11月26日

主査：東北大学大学院教育情報学研究部教授 北村 勝朗

副査：東北大学大学院教育情報学研究部准教授 中島 平

副査：東北大学大学院教育情報学研究部教授 熊井 正之

本研究は、「社会文化的アプローチ」の視点から自然な日本語習得の問題を捉え、中国人日本語学習者の日本語学習における学習方略に焦点を当て、中国人日本語学習者の自然な日本語修得に向けた学習環境改善の手立てを提案することを目的としたものである。

今日、世界の様々な国で日本語が学ばれている。中でも中国は、日本語学習者数が世界第一位であり、数多くの大学で日本語学習が展開されている。しかしながら、中国の大学における日本語専攻の学習者にみられる傾向として、文法に偏った学習スタイルが多い点、実際の会話場面での不適切な表現、更に表現の唐突さや違和感といった問題点が指摘されている。実際、日本語専攻学習者が日本語母語話者とコミュニケーションを行う場面では、「不自然な日本語」という指摘を受けることが数多く報告されている。こうした不自然さや自然さといった問題は、単なる学習方法の問題ではなく、言語の学習観や学習方略と密接にかかわる課題として捉えることが重要である。したがって、自然な日本とは何か、そして如何に自然な日本語を習得するか、について考究することは、現在の中国における日本語学習の在り方を問い直す上で重要な視点であると言える。

こうした問題意識を踏まえ、本研究ではヴィゴツキーが提唱する社会文化的アプローチを理論的枠組みとして設定した。この立場から第二言語の習得過程を考察する際、社会文化的要因は密接に関連したものとして考える必要がある。こうした社会文化的アプローチに依拠した日本語教育の研究は、いわゆる知識や技能の習得を含めた人間主体の行為や変容を具体的な文脈の中で捉えようとする見方にその特徴をみることができる。

また、本研究では自然な日本語を、1)文脈を把握し理解する 2)状況を把握し理解する 3)文化社会的背景を理解する 4)理解し合う相互関係を構築する、の4つの側面によって捉えた。

更に社会文化的アプローチを研究の枠組みとし、以下の3つのテーマに沿って自然な日本語習得に向けた学習環境の在り様について検討を行った。具体的には、下記の通りである。

1)他者（学習者同士、指導者）と学び合う環境構築

学習者を取り巻くコミュニティーや社会的環境に対する理解や、文化としての日本語の理解、および他者との共同的学习、文化社会の理解を促進する学習方略の分析、またそうしたプロセスにおける他者への学びを通じた学習観の変容の分析

2)社会的体験を通じた日本語学習方略の再構築 社会との相互作用により得られる日本語学習の再構築を促進する学習方略の分析

3)社会での日本語活用を通じた日本語学習方略の再構築

実用的日本語の実践を促進する学習方略の分析

研究の方法論としては、質的研究法を採用した。これは、学習者が自身の置かれる環境と相互作用の中で築いた学習観および学習方略の体験について深く趣味的に記述することが求められることによる、具体的なデータ収集の内容は以下の通りである。

- 1)インタビュー調査（第4章、第5章、第6章）
- 2)授業実践の参与観察記録（第4章、第5章）
- 3)授業に対する質問紙調査（第4章、第5章）
- 4)ジャーナル・アプローチに記載されている学習者の日本語表現（第4章、第5章）

5) ジャーナル・アプローチでの自由書き込み掲示板「みんなの広場」の記述（第5章）

研究1では、ジャーナル・アプローチを活用した他者と学び合う相互作用の中で、学習者同士または学習者と教師とのかかわりの分析を行った。その結果、学習者が他の学習者の学習過程を意識することで自身の学びの再認識を促し、「伝え合い理解し合う」という自然な日本語学習における協同性の一側面が確認された。また、「日本語が用いられる状況を把握し意識する」という自然な日本語活用が意識され、学習者が教師や他の学習者を巻き込む形で、日本での学習過程における自身と日本語との関係が変容している点が明らかとなった。更に、日本語の学習観が変容し、そうした学びを教師が方向付けていく点が確認された。そうした学習観の変容過程においては、学習者のメタ認知活動が重要な役割を果たしている点が明らかとなった。

研究2では、中国の大学においてジャーナル・アプローチ活動を体験した日本語学習者のうち、来日して日本の文化社会の中で日本語と触れる機会を得た5名を対象とし、それまでの日本語学習をどのように捉えているのかについて分析を行った。特に、日本での学びと中国での学びを比較し、学習観および学習方略がどのように捉えられ、どのように変容したのか、に焦点を当て分析を行った。その結果、

学習者が日本語学習に対し、自然な日本語の習得は日本語母語話者の表現を模倣するだけではなく、文化社会的背景を含めて相手の表現を受け取り理解し、自身の経験と重ね合わせた上で、既存の日本語思考力に基づき新しい知見が生まれる過程であることを再確認している点が明らかとなった。

研究3では、来日しているスポーツ専攻留学生を対象に、実践的な場面における日本語習得の過程に焦点を当てた検討を行った。その結果、スポーツ専攻留学生は、スポーツの技能習得という文脈の中で、今置かれている状況を把握した上で、教える関係性を意識したかかわりを重視した日本語の学びが実践されており、それが自然な日本語の文脈、状況、文化、および相互関係という側面と関わっている点が明らかとなった。

つまり、自然な日本語習得に向けて、「他者との協同的学習過程」を共有し、「伝え合い理解し合う」中で、「日本語表現が用いられる状況」を把握・意識し、そうしたプロセスにおいて学習者自身が「日本語との関係が変容する」といった関係性が確認された。更に、「社会文化的背景を含めた相手の表現」と「自身の学習経験」とが重なり合うことにより、新しい日本語の知見が生まれる点が明らかとなった。その新しい日本語の知見が、自然な日本語習得の「アプロプリエーション」である点が推察された。